岡藩に於ける心学

―広徳舎の由来について―

北村清士

嘉永二酉年四月五日（西暦一八四九年）、岡藩士服部小平太は参勤交代で在府中、江戸の参前舎に中村徳水先生を訪うて、予ねて熱望の心学入門を乞うた。中村先生は引見して即座にその入門の手続を終了させた。参前舎は世人周知のように江戸に於ける心学の塾で、彼の中沢道二先生の創立したものである。服部は大いに喜び、早速同藩士の阿南与平次・広瀬定吉・田代敬策の三氏を勧誘して入門させたのである。次で嘉永四亥年（西暦一八五二年）九月、府内藩主松平侯の家臣阿部容斎・岩田与兵衛等の組織する一貫舎の招請で、中村徳水先生は府内に巡講されることになったが、その時前記の岡藩士四名は、このチャンスを逃してはならぬと鳩首協義して、中村先生に使を派遣してぜひ岡城下に巡講することを要請した。

中村先生も四氏の熱情に動かされてこれを快諾され、同年九月八日府内を経て竹田町へ来り、城下の郊外にある赤坂広瀬弁左衛門の宅に止宿した。その翌九日中村先生は旅の疲も忘れられ、竹田町字西浦町にある浄土宗派の正覚寺を講席に選び、同十七日まで九日間熱辯を揮われたが、初めての試みであるにもかかわらず非常な人気で、入門者目白押しの有様で聴衆は三百名を突破した。この人々は即時入門者名簿を作成しこれを石田先生入門譜と呼称した。即ち心学の創始者石田梅巖先生への入門者名簿ということである。

同十八日中村先生は再び門弟と袖を分って府内に向って出発させた。嘉永五年二月廿日、中村先生は積雪を踏んで再び竹田城下を訪ずれた。そうして三月十三日まで前回と同様に正覚寺を講席として講話が続けられたが、二度目の来竹とあって連日

前回を凌ぐほどの盛況であった。同十九日からは郷中部落の懇望を入れられ、村々への巡講が繰り展げられた。この巡講は五月八日まで約五旬に亘って続けられ、全く文字通りの東奔西走の活躍で、その成果たるや亦格段のものがあった。なお五月九日から二十四日までは再び城下に滞在され、今度は藩士の重だった人々を対象に講述された。ところが二十五日は早暁出発され久住を経て熊本の巡講に赴いた。

かくて岡藩の心学熱は大いに振興し、その余波は大阪にも飛び、嘉永五年十月六日、大阪の岡藩蔵屋敷に於て中村徳水先生を特に招くこととなった。講話は五日間であったが、在阪の藩士に多大の感銘を与えた。その翌嘉永六年一月二十九日、中村先生は折からの風雪を犯して、三度竹田に来遊された。爾後四月三十日まで三ケ月の長期に亘って熱心に講述啓蒙に従事された。しかし其の時は主として郷村へ出張され、次倉（工藤宅）、入田（佐藤宅）、原尻（古庄宅）長湯（大塚宅）等の、庄屋役宅を講席として開莚され、これまた立錐の余地なき超満員に終始した。先生は長湯を最後に五月一日再び竹田城下に帰り、教式に依る荘厳な修行式が挙行されたのである。

かくして中村先生の熱心な講話は三度の来遊に依って、顕著な成果を納め庶民の蒙を啓いたが、こうした動向に対して岡藩の儒者や上層階級は白眼視して、極めて批判的態度であった。後に講師に抜擢された宗六翁の如きさえ初めは入門を拒んだほどあった。しかし当時の藩主であった中川久昭公（藤堂家から養子となった）はむしろ好感を持って多くの便宜を与え、村々の庄屋に対して開講に出席するよう御触書を発した。これはこの講話に依って勤倹の良習を助長し、当時の間引・捨子の悪風を矯正するために利用しょうとしたものである。

さて中村先生は五月二十五日府内まで数名の門弟に護られて江戸へ帰られた。その翌安政元年七月十七日、竹田城下に於て心学門弟の入門譜中の主な人物である服部・阿南・広瀬等の発議で、下木小泉邸（藩士）で道話会が初めて藩士の手で開かれ、他の藩士も多くこれに参加した。そこで今まで日和見的の藩士ももはや従来の如くこれを白眼視するわけには行かなくなっ

た。これは心学に対す大きな理解と進境と云わねばならない。これと対応するかの如く、同七月廿日に江戸藩邸でも親しく中村徳水先を招いて定府藩士間で開莚が行われた。

以上の如く我が岡藩に於ては僅か五・六年間にもかかわらず、心学の学風は一時的にもせよ藩内を風靡してしまった。そこで入門者の将来に備えて学舎の建設を痛感するようになった。依って安政二年二月竹田町慶順川（現在の広家）に新に学舎を建て、これを広徳舎と称することとした。この時舎前に掲げた広徳舎の額は京都に於ける心学の泰斗上河撲庵先生の筆であった。また講堂の正面にかかげた石田梅巖先生の肖像絵並に祭式に用いた諸道具は、藩士鴨宮右衛門・同宗源作氏の斡旋で、悉く京都から取寄せたものである。この広徳舎の建築も極めて順調に進みその翌三年三月に竣工した。そこで四月陽春の候を期して、盛大に落成式を挙行し、恩師中村先生を招請しようと企画中、測らずも安政三年四月三日中村先生は五十七才で急死された。この悲報に接し多くの門弟は期せずして哭泣し、その夜は遙に哀悼のお通夜を行った。そこで亡き中村先生の代理として、広島から心学の権威である栗原如心先生を招いて、一応広徳舎の落成式を行い、引き続いて記念講演会を開催した。この際も中村先生の時と同様に諸所組村を巡講したが、各地からの巡講申込が多くて、文字通り引張りだこの嬉しい悲鳴であった。特に原尻や玉来の講席ではいずれも超満員の盛況であつた。栗原先生は十日間の予定で、これが終ると直に広島へ帰られ、その帰国後は新に藩士鴨宮右衛門が広徳舎の講師に任命された。

講師の資格称号は当時に於ては京都の石田梅巖先生の第一の高弟手島堵庵先生の創設した、明倫舎から授与されるもので、この岡藩においては宗六翁・阿南与平次・佐藤龍次・後藤友三郎の諸氏が逐次に任命されている。

ところが明治維新となると、政令により明治六年三月に心学は神道とされ、教育ではなく宗教の一つと改変されてしまった。同時に講師の名称が教導職となったのである。而も政治や思想の急変で心学の入門者は著しく減少した。減少の最大要因は小学校令の頒布であって、生徒はおおむねこれに吸収されたためである。

その上に明治十年の西南役で広徳舎は惜くも兵火に罹って、舎棟は勿論のこと祭具や梅巖の聖像・入門譜等は悉く烏有に帰してしまった。ただ広徳舎の看板だけが焼け残ったので、これを丹幸太郎氏の宅に移して、型の如く講義を続けたのである。しかし新規入門者はなく、従来の同好者の集会に過ぎなかった。

これは竹田だけの情勢ではなく全国的の傾向であった。そこでこの頽勢を盛り返す打開策として、東京の参前舎が中心となって、多くの心学者達は神道大成派に帰属することとなったが、京都の明倫舎は心学揺籃の地だけに飽くまで学問の立場から、大成派に入ることに猛然と反対した。この間にあって我が廣徳舎は、本来から云えば東京の参前舎一派と行動を共にすべき立場にもかかわらず、京都の明倫舎派と行動を共にして心学の牙城を固守することとした。かくしてともかくも丹氏の宅や或は正覚寺を講席として明治二十五年（西暦一八九二年）まで継続されたのである。回顧すれば竹田地方に於て心学教育の行われたことは、その創設の嘉永二年から明治二十五年まで約四十余年の長い期間で、ともかく地域の庶民教育に尽した業績は高く評価してよいことであった。即ち広徳舎出身の人材も相当数に達している。服部小平次・鴨宮右衛門は講師の筆頭として学殖深く徳望も高い。宗六翁は有名な道歌を作り斯学興隆の基盤を樹立した。しかも宗氏は後に初代の直入郡長として政治的にも敏腕を揮った。小原正朝は大分県大書記官として県政に寄与すること少くなかった。また画家渕野桂仙は同門出身の異彩的存在である。終りに広徳舎の主な門弟一覧を示せば、

- 阿南与平次
- 宗六翁
  - 広瀬弁右衛門
    - 佐藤竜二
    - 上田安周
    - 渕野桂仙
    - 丹忠蔵
    - 後藤友三郎
- 高野菊三郎
  - 佐藤東平
  - 安威善男
  - 丹幸太郎
- 広瀬定吉
- 田代敬策
- 宗源作

また、講師となった人　鴨宮右衛門・阿南與平次・宗六翁・佐藤竜次・後藤友三郎・阿南寿夫

次に、政令改組後に教導職となった人　宗六翁・阿南與平次・佐藤竜次・後藤友三郎・上田安周・渕野桂仙

さて西南戦争後は心学道話もいよいよ不振となった。そこで明治十三年に至って心学に志すものは相謀って、その当面する打開策に乗り出した。まず京都の本舎明倫舎においても、「心学道話」の名称を以て講義を強行することとなった。依って竹田に於て同年二月二十日総代丹忠蔵並後藤友三郎の名義を以って大分県令宛、職務・職業の余暇を割き庶民多数の需めに応じて講師の名義にて講演仕り度き請願書を提出した。これに対し同年五月四日付を以て、左の如き許可書が下付された。

本年二月二十日付ヲ以テ心学道話再興之義伺出之趣旨、差支無之候条此旨相達候事

但講席ヲ開キ聴衆ヲ集メ候節ハ其都度所管之警察署ヘ届ヅベシ。

明治十三年五月四日大分県令西村亮吉印

これを要するに心学は日常卑近の倫理運動として一時黄金時代を築いたが、明治時代に入ると、心学の特色というべき本心自得の修行の面が、次第に変貌して「説き諭す」教化の面に重点が置かれ、謂うならば「道話」的に堕落した。それがため新しい西洋の革新思想や政令の改正、教育制度の改革に追われ、やがて幻滅の悲哀を感ずるに至ったのである。

注　広徳舎の平面図は現存しているが省略